



今の子どもたちはずさんでいる。確かにそうだ。しかし子供が荒れる背景は、それほど不可解なものだろうか。長らく日本の教育は、先進国になるための工業化という国家の至上命令を実現するための一手段だった。そして学校は、子供が日本の集団主義の風土に育てられた権威に従順な人間であることを自明の前提としてきた。しかし豊かな社会に生まれた世代には、工業化はもはや説得力のある目標ではありえず、彼らは学校の存在理由が分からなくなっている。そして都市化や核家族化が日本の社会を大きく変容させた中で、彼らは強く個を意識する人間として育った。

● 過重な荷背負う子ら

だから今の子供は、個と集団の関係についてかつてなくデリケートな感受性と要求を持つ世代といえる。彼らは極度に幼くわがままであると同時に、自分が他者に正当に承認されるかどうかということに深い不安を感じており、この不安ゆえに子供心には大きすぎる荷を背負いこんでいる。してみれば子供たちの荒れには、意味を失い自分の根本的な関心には応えてくれない社会制度に対す

る人間的な抗議の要素もあると見るべきではないか。そして彼らは、集団主義の幻影に相変わらずとっぴり漬かった大人か

# 教師を社会が支える時

すさんだ学校現場への処方せん

朝日新聞 98(H10). 4. 13

らは助言も協力もないうままで、個としての自分から出発して子供同士で社会を作らなければならぬ。そこから、集団を拒否して家にこもる不登校児が出てくる一方、いじめやシカト、暴力や脅迫によるとんでもない集団作り、社会作りが試みられることになる。個の自立という戦後の日本人の目標が「人は互いに狼である」という状況を学校にもたらすとは、誰も予想しなかったことだ。子供たちは社会の正しい作り方を

## 自主的活動の余地を与えよ

### 教育委員会公選制の復活も



野 曠 関 (評論家)

教育においては、こうした市民育成型の教育は一度も学校の公的課題となつたことはないが、子供の荒れはこのことに対する未来の市民からの抗議でもある。その意味では、学校の意義と課題は現在むしろ大きくなってきた。

● 制度の「維持要員」に

しかしながら学校がこうした方向に転換するとしても、そこで最大の障害となるのは教師の在り方であ

のが教師の仕事などという考えは、日本の教育法規にはないのだ。これでは子供の悩みに役人のように対応する教師がいても当然である。この現状は早急に改め、教師とは将来の市民を育成する教育者であることを法文に明記すべきだ。それだけではない。さらに文部行政から相対的に独立して自らの創意と責任で子供の教育にあたる自由を、個々の教師に大幅に保障すべきだろう。教師に対するこの自主決定権の授

● 社会に責任を負う教師

しかし教師の自主性の拡大からは、誰が教師をコントロールするかという問題が生じてくる。その答えは「社会」である。教師は究極的には、文部省ではなく社会に対し子供を教育する責任を負っている。そしてこの社会に対する教師の責任を明確にするには、戦後の一時期にあった地域住民による教育委員公選制の新しい形での復活が検討されてい

せき・ひろの 一九四四年、東京都生まれ。早稲田大学卒。通信社記者を経て、思想・教育などの評論活動に入る。著書に『教育、死と抗う生命』『歴史の学び方について』など。

知らないで、個と集団の間で激しく揺れ動く。だからこそ彼らが今学ぶ必要があるのは、社会契約の精神なのだ。人間は互いに異質な個であっても、自由な同意に基づいて社会のルールを制定することができ

る。「今の学校現場には、もう自分を支えるものがない」と訴える教師は多い。この嘆きは、偶然ではない。学校教育法をはじめとする日本の教育法規を見ても、学校制度についての事細かな規定はあっても、なんと「教師とは何者か」についての規定がない。教師は、学校制度維持要員とでもいべき、顔のな

い存在でしかない。子供と向き合うと

る。だから彼らは、教師が制度の口ポットとして振る舞っているか、それとも自らの言動に人格的責任をとる教育者であるかについて、きわめて敏感である。教育は、大人と子供の経験や知識の差にもかかわらず、世代間の友情は可能であるという信念の上に成立している。そして今日でも、友情こそ教育の原点であることに変わりはない。このことを理解せず大人の子

供関係を力関係とみなして子供に制度の論理を押しつける教師は、子供の世界に力への信仰を植えつけてしまう。明日の教育は、制度いじりではなく、教師―生徒関係の内発的な変化の中からしか生まれてこない。そしてこの関係が変化するためには、まず教師自身が現在の学校の重圧から解放されねばならないのだ。

一九七〇年代にいじめなど学校の危機として始まった事態は、今や社会全般にわたる世代的な危機に拡大してきた。しかし世代間の交わりの最前線に立っているのは、やはり教師たちであることに変わりはない。それだけに、意欲的な教師がいかに自主的な活動の余地を保障し社会として彼らを精神的に支援するか、学校現場外の者も真剣に考えるべき時が来ている。